『検察の暴走とメディアの加担―小沢問題とは何か―』

木村　朗（鹿児島大学教員、平和学専攻）

１．小沢一郎問題とは何かー小沢問題をめぐって二つに割れ続ける世論

① 西松建設事件、② 陸山会事件（水谷建設）、③ 小沢裁判（検察審査会による強制起訴）

Ａ　金権政治家の不正献金疑惑追及→「政治とカネをめぐる問題」（「違法な犯罪行為」）

※「検察の正義」（東京地検特捜部＝「史上最強の捜査機関」）を前提とした「小沢ＶＳ検察」という問題

Ｂ　“えん罪（でっち上げ）”“報道被害”→「国策捜査」による不当な逮捕・捜査・裁判

※　「検察ファッショ」と「メディア・ファシズム」が結合した「静かな政治クーデター」:
「民主党ＶＳ全官僚機構」あるいは「鳩山連立政権ＶＳ官僚機構・自民党・マスコミ（・米国)」　という権力闘争・政治闘争

※　「国策捜査」か？（森法務大臣の指揮権発動、漆間巌官房副長官のオフレコ発言、石川知裕議員を取り調べた検事の脅し的文句、検察審査会への捜査報告書の捏造）
検察の暴走とメディアの加担＝権力とメディアが一体化した情報操作・世論誘導
→検察権力と司法記者メディアの癒着構造（民主主義の危機＝ファシズムの到来）

＜関連事件・裁判＞

Ａ　三井環事件（検察の裏金問題の告発）→「獣（けもの）道」（官邸の犬となった検察）
※　検察が犯した三つの犯罪

Ｂ　佐藤栄佐久前福島県知事の「汚職」事件→国策（原発）反対の首長を特捜が政治弾圧
※佐久間達哉現東京地検特捜部長、大鶴基成東京地検次席検事、前田主任検事らが関与！

Ｃ　郵政不正事件（村木厚子氏、石井一民主党副代表、前田主任検事によるＦＤ改ざん事件）
※　鳩山由紀夫氏の政治献金（「故人献金」の謎）事件の影響
※　鈴木宗男（・佐藤優）事件との関連（ロッキード事件やリクルート事件、日歯連事件、朝鮮総連ビル詐欺事件、ライブドア事件、防衛省汚職事件なども）

２．政権交代とは何であったのかー日本で最初の本格的な政権交代（一種の「市民革命」）

＜挫折した脱官僚政治と対米自立＞

Ａ　脱官僚政治（官僚主導から政治主導へ）…事務次官会議の廃止、特別会計の見直し、「歳入庁」構想、天下りの廃止、機密費の廃止、日米密約の調査・公表

Ｂ　対米自立…「より対等な日米関係」の構築、海上自衛隊の撤退、年次改革要望書の廃止、日米地位協定・思いやり予算見直しの失敗、普天間問題での「国外移転、せめて県外移転」の模索と挫折

＜幻となった検察改革とメディア改革＞

※検察権力と記者クラブ・メディアの共犯関係（検察とマスコミのリーク情報を通じたもたれ合いの関係）:「検察官僚と司法記者クラブが横暴を奮う恐怖国家」（上杉隆）、「検察庁という組織の、骨の髄まで腐った不誠実さと恐ろしさ」（鳥越俊太郎）、「検察リークを受けて報道がつくられているというより、むしろメディア自らが進んで検察の提灯持ちに走っている」（青木理）、「特捜検察の捜査能力の劣化とモラルハザード」（魚住昭）、「検察権力の恣意的乱用とそれに追随するマスコミの権力監視機能の放棄、そして、「検察の正義」を微塵も疑わずにマスコミ報道を鵜呑みにして翻弄される我々一般国民の思考停止こそが目下の最大問題、すなわち日本の民主主義の危機をもたらす根源的問題である」（木村朗）

※「彼らは政治家の汚職を摘発し正義を貫く事が正しいと思い込んでいるが、実際は民主党政権による司法制度改革で検察の権益が縮小することを恐れているはずだ」（堀江貴文）

Ａ　検察（司法）改革…検察･警察･裁判所を含む司法制度改革！「検察の犯罪を糺す機関は存在しない」という点が最大の問題：起訴独占主義と起訴便宜（裁量）主義の弊害

① 取り調べの可視化法案、②　民間陣からの検事総長の登用（検事総長人事を国会承認案件に）、③　裏金の解消、④　裁判員制度の見直し、⑤　死刑制度の見直し、⑥　証拠の全面開示のための法改正の断行

Ｂ　メディア改革…真の意味でのメディアの再生を！（神保哲生氏の指摘）

① 「記者会見のオープン化」（政府の記者会見をすべてのメディアに開放し、既存のマスメディアの記者クラブ権益を剥奪する。）

② 「クロスオーナーシップの規制・禁止」（クロスメディア：新聞社とテレビ局の系列化のあり方を見直す。）

③ 日本版ＦＣＣ（米連邦通信委員会のように行政から独立した通信・放送委員会）を設立し、放送免許の付与権限を総務省から切り離す。

④ ＮＨＫの放送波の削減を検討する

⑤ 新聞再販制度・押し紙制度の見直し・廃止

⑥ 電波オークション制度の導入・・・等々

３．日本は民主主義国家・独立国家なのかー「米国の影と圧力」について

※「この政治家は二つの注目すべき持論を隠し持っている。一つは米国との距離を測り直すこと、他のひとつは象徴天皇制を隠れみのにした官僚支配への問題意識だ」（斎藤学）

※　孫崎享さんの日本の「特捜検察」と米国との特殊な関係という重要な問題提起：

「（小沢捜査のー木村）スタートは、外為法か何かで外国から出発していますよね」「「検察の動きを見ていると、アメリカの意思が分かる」

※「日本国内の、国民に選ばれた正当な政治権力に対しても特捜部は歯向かう。その背後には、そもそも出発点からアメリカの存在があった。ということは、東京地検が日本が対米隷属から離れて、独立独歩の道を歩もうとする政治家をねらい打ちにしてきたのは、ある意味で当たり前なんですね」（岩上安身）

A官僚独裁国家：カレル・ヴァン・ウオルフレン氏の指摘

「いま日本はきわめて重要な時期にある。真の民主主義をこの国で実現できるかどうかは、これからの数年にかかっている。 …国際社会で、真に独立した国家たらんとする民主党の理念を打ち砕こうとするのは、国内勢力ばかりではない。アメリカ政府もまたしかりである。 …民主党政権発足後の日本で起こりつつある変化には、実は大半の日本人が考えている以上に大きな意味がある、と筆者は感じている。 …あらゆる国々は表向きの、理論的なシステムとは別個に、現実の中で機能する実質的な権力システムというべきものを有している。 …日本のシステム内部には、普通は許容されても、過剰となるや、たちまち作用する免疫システムが備わっており、この免疫システムの一角を担うのが、メディアと二人三脚で動く日本の検察である。…検察とメディアにとって、改革を志す政治家たちは格好の標的である。彼らは険しく目を光らせながら、問題になりそうなごく些細な犯罪行為を探し、場合によっては架空の事件を作り出す。 …日本の検察が、法に違反したとして小沢を執拗に追及する一方、アメリカは 2006 年に自民党に承諾させたことを実行せよと迫り続けている。 …いま我々が日本で目撃しつつあり、今後も続くであろうこととは、まさに権力闘争である。これは真の改革を望む政治家たちと、旧態依然とした体制こそ神聖なものであると信じるキャリア官僚たちとの戦いである。 …日本の新政権が牽制しようとしている非公式の政治システムには、さまざまな脅しの機能が埋め込まれている。何か事が起きれば、ほぼ自動的に作動するその機能とは超法規的権力の行使である。このような歴史的な経緯があったからこそ、有権者によって選ばれた政治家たちは簡単に脅しに屈してきた。」

※　メディアの劣化と言論統制の拡大

B　米国の「属国」から「属領」へ…終わらない「占領」（間接統治）から「再占領」（直接統治）へ、「トモダチ作戦」と日本の「アメリカ化」（日本本土の「沖縄化」）

４．検察審査査会の闇と最高裁事務局のスキャンダル

※検察審査会は、裁判員制度の先駆的形態：市民から無作為に選ばれた 11 人の審査員が、 検察の起訴・不起訴の処理に対して不服の申し立てがあった場合にこれを審査して、（１） 不起訴相当（２）不起訴不当（３）起訴相当のいずれかの判断を下す。司法制度改革の一環として、裁判員制度導入にともなう法改正で 2009 年５月からは、 審査会が同じ件で２度 「起訴相当」と決議すると、検察ではなく裁判所が指定した指定弁護士により強制的に容疑者が起訴されることになった。小沢裁判ではこの制度改正が完全に悪用された！

※「新政権は検察審査会法を再改正すべきかどうかを検討課題とすべきだろう」（高野猛）

※　当初から批判が多い情報開示の少なさや〝密室性〟黒く塗りつぶされた公開文書。容疑者がまったく意見を言えないことも大きな問題。

① 小沢一郎民主党元代表を「起訴相当」と議決した審査員十一人の平均年齢が不自然な形で一転二転したこと（小沢元代表審査員　生年月も黒塗り）は不可解

② 検察審査会の不正、検察の虚偽報告書に対する裁判所の判断に納得出来ない。

※　強制起訴制度で初の判決公判も「検証へ情報開示を」、指定弁護士による控訴は不当！？

③ 森ゆう子議員が明らかにしたくじ引きソフトの不正
④ 小川敏夫法務大臣による指揮権発動の封じ込め
※「健全な法治国家のために声を上げる市民の会」が、最高検察庁に新たな告発状を提出した。被告発人である佐久間達哉（法務総合研究所国連研修協力部部長）、木村匡良（東京地方検察庁公判部副部長検事）、大鶴基成（元最高検察庁公判部部長検事）、斉藤隆博（東京地方検察庁特捜部副部長検事）、吉田正喜（元東京地方検察庁特捜部副部長検事）、検察審査会の第五検察審査会の事務局長、担当課長らを証人申請が採用されるかが焦点。
※　最高裁事務局のスキャンダル：最高裁判所発注のコンピューターシステム関連の一般競争入札で「一社応札」が続出し、１００％を含む高い落札率が大半を占めていた疑惑！
改めるチャンスが何度もありながら、一向に変わらなかった最高裁の手法。

５．現在の閉塞状況を打開するためには何が必要か
【検察とマスコミが一体化した情報操作による小沢氏の狙い撃ちと民主党叩きの世論誘導が米国の圧力をうける形で行われた可能性、すなわち検察権力のリーク情報を無批判的にマスコミが裏づけを取らないまま小沢氏を犯罪人扱いするような過剰な印象操作･偏向報道を一方的に垂れ流し、その結果、検察の正義を疑わない一般国民がそれを鵜呑みにして小沢批判を強めて民主党離れを加速させるというある意味で分かりやすい構図】
※ 旧勢力（小泉流に言えば「守旧派」「抵抗勢力」）による既存秩序の維持と既得権益の保持を目的とした改革潰しの動き！
※ マスコミが検察の監視役ではなく、「検察の正義」（あるいは「正義の検察」）という前提を無批判に受け入れて、検察の「最大の味方」となってその露払いや煽り役を果たしてしまうことが最大の問題である！
※ 「小沢不起訴になってから検察の危機が言われていますが、それ以上に、今回はマスコミの危機を露呈させたと言えますね」（魚住昭）

Ａ　検察による恣意的な強制捜査と違法な取調べによる直接的な人権侵害
Ｂ　検察のリーク情報に依存したマスコミの過剰な偏向報道と、その影響をまともに受けた世間の人々のバッシングという深刻な報道被害
① 市民の覚醒と官邸デモー政府不信とメディア不信の高まり
② ソーシャル・メディアとメディア・リテラシー

【海外メディアの「報道の５原則」原則１　「推定無罪の原則」（最初から有罪であるよう印象づける報道はしないこと）、原則２　「公正な報道」（検察の発表だけをたれ流すのでなく巻き込まれた人や弁護人の考えを平等に報道すること）、原則３　「人権を配慮した報道」（他の先進国並みに捜査権の乱用を防ぐため、検察・警察の逮捕権、家宅捜索権の行使には、正当な理由があるかを取材、報道すること）、原則４　「真実の報道」（自主取材は自主取材として、検察・警察の情報は、あくまでも検察・警察の情報である旨を明記すること）、原則５　「客観報道」（問題の歴史的経緯・

背景、問題の全体構図、相関関係、別の視点などをきちんと報道すること）

【小沢問題関連重要文献】

・小沢一郎を支援する会（編集）『私たちはなぜ小沢一郎を支援するのか』（諏訪書房）[新書] ノラ・コミュニケーションズ（2011/5/15）
・森 ゆうこ『検察の罠』日本文芸社（2012/5/26）
・平野 貞夫『小沢一郎 完全無罪 -「特高検察」が犯した 7 つの大罪』(講談社プラスアルファ文庫（ 2011/7/21）
・郷原 信郎『検察崩壊 失われた正義』毎日新聞社（2012/9/1）
・カレル・ヴァン・ウォルフレン『人物破壊 誰が小沢一郎を殺すのか？』角川文庫(2012/3/24)
・マーティン・ファクラー『「本当のこと」を伝えない日本の新聞 』双葉新書（-2012/7/4）
・山崎行太郎『それでも私は小沢一郎を断固支持する』総和社（2012/6/23）
・三井 環『ある検事の告発』（双葉新書）(2010/12/22)
・村木厚子編『あきらめない 働くあなたに贈る真実のメッセージ』 日経 BP 社（2011/11/28）
・石川知裕『悪党―小沢一郎に仕えて』朝日新聞出版（2011/7/7）
・鈴木 宗男『汚名-検察に人生を奪われた男の告白 』
・佐藤 栄佐久・『知事抹殺 つくられた福島県汚職事件』平凡社（2009/9/10）
・大坪 弘道『勾留百二十日　 特捜部長はなぜ逮捕されたか』文藝春秋（2011/12/16）
・青木 理『国策捜査―暴走する特捜検察と餌食にされた人たち』金曜日（2008/05）
・副島隆彦、植草一秀、 高橋博彦『国家は「有罪(えんざい)」をこうして創る』祥伝社（2012/6/30）
・粟野仁雄『検察に、殺される』（ベスト新書）ベストセラーズ（2010/11/16）
・岐 武彦、山崎行太郎氏『最高裁の罠』（志ケイアンドケイプレス 、2012/12）
・佐藤 優／魚住 昭『誰が日本を支配するのか！？検察と正義の巻』マガジンハウス（2010/8/12）
・石川 知裕／佐藤 優 『小沢一郎はなぜ裁かれたか―日本を蝕む司法と政治の暴走』 徳間書店（2012/3/26）
・今西憲之／週刊朝日取材班『私は無実です　検察と闘った厚労省官僚村木厚子の 445 日』（著）朝日新聞出版（2010/9/7）
・孫崎 享（著）『戦後史の正体』創元社; 初版（2012/7/24）
・孫崎 享（著）『アメリカに潰された政治家たち』小学館（2012/9/24）
・孫崎 享（著）『日本の国境問題　尖閣・竹島・北方領土』(ちくま新書)
・孫崎 享（著）『日米同盟の正体~迷走する安全保障』(講談社現代新書)
・郷原 信郎(著)『検察の正義 』(ちくま新書) (2009/9)
・郷原 信郎(著)『特捜神話の終焉』 飛鳥新社(2010/7/22)
・『郷原 信郎(著)検察が危ない』（ベスト新書） (2010/4/9)
・三井 環（著）『検察の大罪 裏金隠しが生んだ政権との黒い癒着』] 講談社（2010/7/29）
・三井 環（著）『「権力」に操られる検察 』（双葉新書）双葉社（2010/7/21）